

小田実全集（小説 第36巻）

くだく うめく わらう



講談社

小田実全集

Makoto Oda



目次

I

会いに行く

くたく

終る

II

殺す

助ける

うめく

わらう

8

30

60

82

113

141

171

くだく

うめく

わらう

I

会いに行く

私は娘に言った。

「来年は『北朝鮮』の親類に会いに行こう。」

気軽に言った。それはまさに気軽な、元来そのはずであることがらであったからだ。秋になりかかっていたころである。来年四月、娘は中学一年生になる。そろそろ分別がつく、物の道理が判る年ごろだ。いい機会だ。そのあたりで、彼女がこれまで会ったことのなかった彼女の伯母、伯父、イトコに会いに行く。いや、彼女を彼らに会わせに連れて行く。これは親のつとめ、そして、情けだ。彼女が彼らに会ったあと、どうするか、それは彼女が決める。彼女の自由だ。

私は娘につづけた。

「おまえは日本でアッパの側の親類にも、オンマの側の親類にも、いくらでも会っている。オンマの側の韓国にいる親類にも、ハルベの葬式のと看、何人も会った。しかし、『北朝鮮』にいるオンマの姉さん、おまえの伯母さんにもつれあいの伯父さんにも、おまえのイトコになる二人のあいだの息子、娘にも誰ひとり会っていない。アッパも年をとった。みんなが元気のうちに会いに行こう。」

私はたたみかけるように言った。私という彼女のアッパが年をとったことは言ったが、彼女の「北朝鮮」の伯母さんが癌に罹っていることは言わなかった。「みんなが元気のうちに」の一語にその意

味あいを込めていた。娘も私と彼女の母親とともに西宮で「阪神・淡路大震災」に被災している。一期一会。その気持は娘にもある。いや、判る。

娘の母親、私が「人生の同行者」と呼ぶ私のつれあいは「在日朝鮮人」で、「オンマ」は朝鮮語で母親、いや、「お母さん」の意味だ。その呼び方で、娘は母親を呼んでいる。「アッパ」は「お父さん」。娘は私をそう呼び、私も娘にむかつて自分のことをそう言う。「ハルベ」は「祖父」、いや、「おじいさん」だ。「北朝鮮」はもちろん朝鮮民主主義人民共和国の略称だが、私の「人生の同行者」について書いた「在日朝鮮人」ということばには政治的意味あいはない。「在日韓国人」と書いても同じことだ。『北』も『南』もわが祖国」で生きている彼女自身の生き方の原理にそくして「在日朝鮮人」「在日韓国人」の区分けは意味はないし、彼女の家族には、これは「在日」の家族の多くにも共通して言えることだが、「在日朝鮮人」「在日韓国人」どちらもがいてにぎやかである。私が娘に言った、おまえは日本でオンマの側の親類にもいくらでも会っているということばはどちらの側の親類もふくんでいる。親類が親類に会う。これは人間社会にあつて当然のことだ。この当然のことのなかには「南北分断」はない。「南北共生」が当然のこととしてある。娘は私同様日本人だが、どちらの側の親類とも会い、つきあうことで、その人間社会として当然のことをしている。

しかし、「北朝鮮」の親類には、彼女はまだ会っていない。人間社会として当然のことをまだして
いない。

『北朝鮮』の人は日本にやつて来れない。『北朝鮮』の親類に会うのなら、こちらから出かけて会いに行くよりほかにない。」

私は話にしめくりをつけたが、娘のほうはちがうしめくりを考えていたようだ。

「オンマも行く……のね。」

「行く。」

私はうけあうように言い、娘ははじめて安心したふうにならずいた。

「会いに行く」と「会う」はちがうと、私は娘に来年の「北朝鮮」行の話をしたあと考え出していた。「会う」は、それこそ道でたまたま出会っても「会う」だし、先方から会いに来てくれても、「会う」だ。二つともに、そこには自分の意志の動きはない。すべて本質的に受け身だ。自分の意志が動くとすれば、道で見かけたが会いたくないので道をそれたとか、会いに来たが断わったとか、拒否の場合だけだろう。「会いに行く」はちがう。自分から出かけて行って会おうとする意志の動き、努力が強弱はあってもそこにはある。ある場合には、その意志の動き、努力はなんと少しでも会いに行くというほどの強いものになる。いや、逆にそれほどの強いものにならないと、会えない。会いに行けない。そういう場合もある。

しかし、親類が親類に会うという人間社会の当然のことをするのに、それほどの意志の動き、努力が要るとは、まさに不幸なことだ。それどころか、一方にそれがまだしもできる可能性はあっても、他方にはない、まったくくない。これはひどいと言うより、むごい。そこにいかなる理由があろうと、うんぬんされようと、人間にとってこれほどむごいことはないくらい、むごい。

私とそのむごさを他人ごとならず感じとつたのは、「阪神・淡路大震災」のあと少し経って、娘の「北朝鮮」の伯母や彼女の末妹である私の「人生の同行者」たちの年老いた父親、彼女たちにとつてのアボジが亡くなったときのことだ。娘にとつてはハルベで、私が娘に言つたことばのなかの「ハルベの葬式」うんぬんはその老アボジの濟州島での葬儀のことだが、彼は「阪神・淡路大震災」の直接の犠牲者ではなかつたとしても、間接の犠牲者と言うよりはもつと密接に関係をもつた、その意味で文字通りの「関連死」の死者だつた。

彼の死のことを書くのが目的でないので手みじかに書いておくのにとどめたいが、彼が彼より一歳年長の老妻——「人生の同行者」たちにとつての母親、オモニ、娘にとつてのハンメ、つまり、「おばあさん」とともに神戸の長田の長屋の居宅、「人生の同行者」たちの「実家」で震災に遭つたときには、彼は癌を長く病んでいて、病状はすでに末期癌の時期に達していた。近所の病院に入院していたのが一夜帰宅を許されて、老アボジと老オモニが一夜をとともに過したところで、未明、その一夜がまだ完全に明けきらないくら闇のなかで地震が起こつた。彼らの長屋は倒壊こそ免かれたものの屋台骨から覆えされた全壊で今は取りこわされてあとかたもないが、地震のあとしばらく経って近所の人が老夫婦の存在を思い出して救出に駆けつけてくれたときには、惨たる屋内の状態のなかで彼らはただ呆然と顔を見合わせながら坐っていた。そのあと、負傷者の対応に手いっぱい病院には戻れなくなつたので、やむなく老アボジは老オモニと近所の避難所の小学校で暮らすことになつたのだが、そこでのコンクリートの廊下の床の上での暮らしがそれまで病院で点滴と酸素吸入とで生命を保つて来た彼にとつていかに苛酷なものであつたか、生命を縮める結果になつたかは容易に想像が

く。交通途絶、大混乱のなか、アボジの何人かの娘とその夫たちが協議、協力し合ってそこから大阪まで車で八時間かかって老夫妻を救出することができたのが一週間後、そのあとすぐ彼らが六十年前に日本へむかつて出て来た濟州島の養子先へ二人を送ったのだが、それは少しでも平和な生まれ故郷で安泰の日々を送ってもらおうとしてのことだった。

しかし、アボジはそこで長くは生きていなかった。地震が起こった一月十七日から三週間足らずの二月の初め、私の「人生の同行者」をふくめて日本にいるアボジの六人の娘はそれぞれに濟州島からの電話で老アボジの死の通知を受け取っていた。

しかし、「北朝鮮」に住むアボジのもうひとりの娘には通知はなかった。これは通知の仕様がなかったと言ったほうが正確だろう。濟州島から「北朝鮮」へ電話をかけられるはずはないし、「党」の「幹部」でない、いや、「黨員」でさえない彼女の夫と彼女の元山^{ウォンサン}の居宅には電話はなかった。あつたところで、国際電話をかけたり、かけられたりできるのは、よほどのえらいさん宅だけだ。日本から電報を打つても届くかどうか判らないし、それだけで何か問題をひき起すことにもなりかねない。地震そのものについては「北朝鮮」でも報道として伝えられていただろうし、「実家」は全壊したもののアボジ、オモニ自身をはじめとして、西宮で被災した私一家をふくめて他の親類の家族もとにかく全員無事であることは、当時「北朝鮮」へ出かけた人に頼んで伝えてあつたから知っていたにちがいないが、その後のことについては、アボジの死をふくめて伝える術^{すべ}は何もなかった。どうしようかと考えているうちに突然彼女にとつてのついで上の姉の大阪の家に彼女からの、「病気の治療のために元山からピョ

ンヤンにやって来た。電話がかけられる知り合いの家からかけている」という前おきをまず早口にしゃべった電話が「コレクト・コール」でかかって来たのは、ちょうど済州島から養子もやって来て、済州島で行なわれることになったアボジの葬儀の相談を何人かの家族でやっていたさなかだった。この彼女のその後のアボジたちの安否を気づかう電話で、彼女はまさにアボジの死の通知を受けることになる。

彼女は絶句し、あと泣き出したが、あととぎれとぎれに話すことばのなかで、彼女は一度たりとも、なんとかして葬儀に出て、アボジの死顔をひと眼でいいから見たいとは言わなかった。そんなことができないことははじめから判っていることだ。口にするだけでかえって悲しみをそそることばがある。そして、ことばには言わないことでもかえって雄弁に語ることももある。どちらにせよ、言わないことばの重みは十分に「コレクト・コール」の電話で伝わって来た。そう電話を受けた大阪の彼女の姉は言い、その重みは話を聞いている私にも十分に伝わって来た。

彼女は済州島からやって来たアボジの養子ともしゃべった。ムコ養子の制度がない朝鮮では、古来、娘ばかりが七人のアボジの家族のような「女系家族」では、相続は一門の家系から適当な男性を選んで、養子にして相続させる。アボジの養子も、その制度、習俗に従ってアボジの相続人に選ばれて養子となった人物だが、彼が養子になったのは彼女が日本を離れて「北朝鮮」に「帰国」したあとだったから、二人は会ったこともしゃべったこともなかった。彼女のそのピョンヤンからの「コレクト・コール」の電話には彼も出たから、それは二人にとつての初の対話でもあれば、期せずしての「南北対話」にもなっていた。しかし、この「南北対話」の話題は、アボジの死だった。その「南北対話」のなか

でも、彼女は一言半句も、葬儀に出たい、アボジの死顔を見たいと言わなかった。それは養子もあとで言ったことだ。

彼女——私の娘にとつての「北朝鮮」の伯母、私の「人生の同行者」にとつての姉が「北朝鮮」に「帰国」することを決意、実行したのは、十七歳の神戸の民族学校の高校生のと看で、それは、たしか、「在日朝鮮人」と日本人の支持者の長年の「帰国運動」が成果をあげて八月に「日朝協定」が調印され、年末十二月に「帰国」第一船が新潟から出た一九五九年の翌年一九六〇年のことだったから、彼女は「帰国」第二船あたりの船に乗ったにちがいない。

「帰国」と言つても、神戸生まれ神戸育ちの彼女のことだ、他の多くの「帰国」者にとつても事情は同じだったことだろうが、「北朝鮮」はまったく「未知の国」だった。このまったく「未知の国」によくも十七歳の少女が家族と離れて出かけて行く気になったものだと私は心動かされるが、それはそれだけ当時の「未知の国」が希望と魅力に満ちた国であったことを示している事実だろう。そして、もちろん、この差別社会の日本で生きて行くのはさきゆきのないことだったし、当時の日本はまだまだ貧しい社会でもあった。その上、彼女自身の話や他の姉妹たちの話を聞いていて判ったことだが、戦後いつときのゴム靴製造で羽ぶりのよかった彼女たちの家計は一転当時はどん底状態になっていたらしくて、医者になりたいという彼女の希望はかなえられるべくもなかった。その希望は「帰国」によつて実現すると考えるのは当然のことだが、もうひとつ、指摘しておきたいのは、「帰国」しても、そのうちまた帰つて来れるだろう、帰つて来れないとしても日本に残った家族と行き来できるよ

うになるだろうと彼女が考えていたように見受けられることだ。「帰国」後の居住先を彼女は「元山」とはじめから希望していたらしいが、それは東海岸の「東海」(トシ、日本海)のことだ。「北朝鮮」「韓国」の地図ではそう出ている)に面した元山が「北朝鮮」ではもつとも南の港で気候温暖である上に、日本にもつとも近い都市であったからだ。

今でも日本から来る船は、その当の「帰国」船をはじめとしてたいが元山にやって来る。元山を居住地として選んだのは、オモニが将来やって来ることも見こした上でのことだ。オモニ自身が言い出したことだったらしいが、オモニの夢は、娘のひとりが住む元山と日本、そして、済州島のあいだを行き来することだった。いや、気候温暖であたたい元山なら住んでもよい。「やがてそうなる」とオモニは彼女に言ったものらしいが、そうならないのなら、まだ十七歳の娘がひとりで「北朝鮮」へ「帰国」することなどオモニが許すはずはなかった。そう彼女は私に言ったが、その口ぶりから見ると、彼女自身がそう信じていたと感じとることができた。

しかし、その夢をまだ彼女は実現していないし、オモニ自身は、たとえ夢が実現したところで、もう行き来などとうていできないほど年老いてしまっている。

一九六〇年と言えば、日本は「安保闘争」で騒然としていた時代だ。その時代に十七歳の少女は新潟を出港してそれこそ当の元山にむかって行ったことになるが、そのころ私は何をしてたか。四月までは、アメリカ合州国「留学」(ここで「留学」と引用符つきで書くのは、大学では勉強したおぼえはないが、アメリカ合州国の社会のなかで暮らすことで多くのことを学びとった気がするからで、

だから、あれは、やはり、「留学」だった)のあと、メキシコから始めてヨーロッパ、中近東、アジアに至る文無し旅行の最中だったし、そのあとは、栄養失調寸前の状態で帰りついた私の健康を回復するのと、あれやこれや食うのに忙しかったときだ。まったく「北朝鮮」とも韓国とも無関係に暮らしていたわけだが、その私が韓国に降ってわいたように関係ができたのは、六三年、当時の韓国政府に招かれて韓国に出かけてひと月暮らしたことがあったからだ。私は今ここでそのときに私が感じたことや考えたことをあらためて書くつもりはない。ただひとつ述べておきたいのは、六〇年代の「北朝鮮」は韓国よりゆたかだと韓国内でも考えている人が多かったことで、それは多くの人の証言によってかなりなまでに真実だったと言える。そして、もうひとつ言うなら、これも多くの人の証言によることだが、「北朝鮮」がもつとも自由で、芸術の華開いた時代でもあった。これは私がこれまでに観た「北朝鮮」映画のなかでもっともすぐれた作品、すくなくともそのひとつだとみなす。チエ・ハクシン「崔鶴信の一家」の原作の劇が大ヒットしたことでも判ることだと私は考えるのだが、そのゆたかで自由だった時代を、もちろんそれが真実だったとすればの話だが、十七歳で「帰国」した少女は体験、享受し得ていたことになる。

しかし、残念なことに、そうとは必ずしも言えない気がするの、彼女は「帰国」後、結核を病み、療養生活を送って、結局、希望の医科大学へ入って医者になる道を選ぶことができなかったことを私は知っているからだ。しかし、失意の少女は未来の夫にそのあたりで出会うことになる。

私には彼女にかかわったのひとつの「イメージ」があつて、それは、ひとりの孤独な少女が学校の

ような建物の廊下のかげで、若い男性と出会う、いや、彼女がすすり泣いているところに彼が通りかかって「どうしたんです」と肩を叩く場面の「イメージ」だが、この「イメージ」でかんじんなことは、肩を叩いたあと彼女と話し出した若い男性に判つたのが、少女が「帰国」少女であったことだ。彼はそこで大いにおどろくのだが、それはその彼女より十歳年上の若い男性も彼女より一年ほどおくられて日本から「帰国」して来た人物だったからだ。二つの孤独な魂があい寄るといふのはありふれた「ラブ・ロマンス」の過去の話を聞いたとき、私の心の画面に浮かび上つて来たのは、そのありふれた「ラブ・ロマンス」にふさわしいこれまたありふれた図柄の想像図だった。私とその想像図の話をすると、あたらずといえども遠からずというようなことを笑いながら口にしていたから、似たようなことがあつたと言つていいにちがいない。いや、ひとつ、彼女は訂正した。若い男性が肩を叩いて少女と話し出したから、彼女が「帰国」だと判るということはあり得ない。「帰国」の女性は、服装、態度からたちどころになみの朝鮮女性とちがうことが判つて、それが羨望ともなればやつかみともなれば差別、いじめの根ともなる。彼女の話はそこまでひろがり、つづいた。

若い男性は、日本の京都で生まれて、二歳までそこで育つたあと、日本の敗戦後、両親の生まれ故郷の濟州島に「帰国」するのだが、濟州島はそのうち今「四・三事件」と呼ばれる民衆蜂起、弾圧、虐殺の場となつて、彼の一家はやがて日本に立ち戻る。密航して日本に帰つて来たのかどうかは聞きもらしたが、とにかく彼は日本で民族教育を受けて大学まで進んだところで「帰国」を決意、実行した。そこにどのようなウヨ曲折があつたかくわしいことは知らないが、「ラブ・ロマンス」の結末は若

い男性は元山の地元の医学専門学校に職を得てロシア語を教え、かつての少女は彼の妻となつて、元山の一角に住居を得て二人の暮らしをかたちづくり、そのうち三人、女、男、男の順で子供が生まれ、長女は音楽専門学校でピアノを学んでピアノ教師となり、長男は大学受験に失敗して軍隊に入り（軍隊に入れば、またもう一度、大学を受験できる）、次男は長男より頭のできがよくて（と父親が私に言った）、「英才少年」を集めて特別に教育する小学校に入った——というようなところで、私は彼らとはじめて会つていた。それは私が「北朝鮮」にはじめて出かけたときで、七六年のことだ。

私が彼らの「人^{ライフ・ヒストリイ}生史」をかなり子細にわたつて書いたのは、そこに「北朝鮮」への「帰国」者の人生のひとつがよく示されているように思えるからだ。彼らの人生を典型的だと言うつもりはない。あくまで、ひとつの例だ。それにすぎない。彼らは「党」の「幹部」となつて出世したわけではないし、逆に迫害を受けたのではない。彼らは彼らなりに人生を生きて来た。私は彼らに会うたびに（と言つて、何度も会つたわけではない。私は「北朝鮮」に出かけるたびになんとかして彼らに会つていたが、「北朝鮮」へ出かけたのも数回のことだ）、どこの国にもそれぞれに自分の人生を平凡に、しかし、なんとかしつかりとかたちづくつて生きている人たちがいて、彼らの人生が、社会であれ国であれ、その根もとをかたちづくつていてという印象をもつた。いや、かたちづくつた。

今は医学専門学校でロシア語を教える彼は、トルストイをよく読んでいて、その話を私とした。いつももの静かにしゃべる人だったが、ときどき、この国のやり方はうまいですよ、指導者はひとりだと思つていたら、いつのまにか二人になつていましたよ、というような確な評言を口にするこ

あった。いつの場合でも抑制のきいた静かな言い方でのごとく、私はそんなとき、どんなとき、ところでも、人はそれぞれに自分の人生を生きている、いや、生きようとしている、それが人間というものなのだ、ときつき述べた印象と重なりながらそこからはみ出てもいる印象をもった。

しかし、彼らの平凡で、しつかりとした人生が決してすべて平坦なものでなかったことは、彼のかつての「ラブ・ロマンス」の相手が年齢よりはるかに老けた女性になっていることで察しはついた。彼女に最初に会ったときのことを書いておこう。私が最初に会ったのは、そのころはまだ結婚していなかった「人生の同行者」から姉に渡してくれと言ってあずかって来た病気がちの彼女のための栄養剤その他の薬品を手渡すためだったが、私をおどろかせたのは、その薬品はたしか自分が手紙で頼んでおいたものであったはずなのに、この国の政府の配慮ですべて満ち足りて暮らしているのに事情を知らないままに日本の家族たちが知らないことをするとしきりに憤慨し出したことだ。しかし、おどろくことはなかった。私を彼女のところ案内してくれた役人がまだその席に残っていた。

八六年、そのころ「西」ベルリンに住んでいた私がモスクワ経由ではるばるとピョンヤンまで出かけたのは、べつに「北朝鮮」訪問を意図したものではなかった。ピョンヤンで私もその一員だった「アジア・アフリカ作家会議」の事務局会議につけ加えて作家の「平和会議」か何かが開かれることになって、二つに出席するために出かけた。会議が終ったあと、アジア・アフリカ各地から主としてモスクワ経由でピョンヤンまでやって来ていた作家たちはくつろいだ気分になってホテルのロビーに集まって、指導者の銅像のばか大きさから始まって官僚主義のおろかしいバツコに至るまでかんに冗談口を叩き始めた。私は途中でロビーに入って来て彼らのアルコールの入った怪気焰に接したのだが、同

じように途中からロビーに入ってきたのが、「アジア・アフリカ作家会議」の事務局員をしていたVだった。Vはソビエト人だがユダヤ人で、英語がめつぼう上手な、頭が火星人のように禿げ上った中年男だった。しばらく作家たちの話に聞き入ったあと、彼が低声でしゃべり始めたそのことばで作家たちが一瞬のうちに黙り込んでしまったのは、彼が低声だが十分に気合いの入った口調でこう言ったからだ。この国にはミスター・オダの姻戚インロウズもいらつしやる。冗談はここを去つてモスクワに帰つてからのことしよう。自分たちはこうしたことでもう十分に体験をもつたのだから。

Vがこのことばを口にしたのは、彼の国ですでに「ペレストロイカ」が始まっていたころだったから、彼はその「十分にもつた体験」を背後にして語っていたにちがいない。ことばは作家たちを黙り込ませるほどの力をもっていたが、それが私にとりわけ辛かったのは、Vが引きあいに出した私の姻戚がさつきホテルに訪れて来た医学専門学校のロシア語の先生であつたからだ。

私は彼をVに、私の義兄にあたる人物だ、ロシア語を教えていると紹介したのだが、Vがロシア語をしゃべり出すと彼は慌てて別れを告げて逃げ出した。たぶん、実物のロシア語を話す人間に出会つたのは、彼にとつてそのときが最初だったにちがいない。Vについてあと一言しておけば、「ペレストロイカ」は彼は体験したが、ソビエト社会主義政権の完全崩壊を彼は見ることはなかった。彼はそのままに心臓発作で急死していた。

いろいろな人の助力、努力で「北朝鮮」への私たちの査証は何月かかかつてとれた。名目、形式はどうであれ、私たちにとつては、親類に会いに行くための査証だ。五月の連休に私たちは行くことにし

た。もう娘は中学一年生になっていた。予定通りのことだ。

しかし、困ったことが起こった。娘の母親が仕事の都合で行けなくなってしまったのだ。

私は娘に地震のときの話をした。いや、彼女のハルベの死のあと、大阪にかかって来た電話の話だ。

「行くか。」

と私は言った。

「行く。」

しばらく黙り込んでから、彼女は答えた。

出発の前日、私は娘と娘の母親と近所のスーパーに出かけて、買い物をした。親類のための買い物だ。いや、あれはもう買い物というものではないだろう。まさに買い物だ。罐詰、インスタント食品、クン製、干物、そして、ティッシュ・ペーパー、トイレット・ペーパー、シャンプー、石鹸、歯みがき。手当り次第に買い、手押し車二台に山と積んだ。最後に、明治チョコレート、森永キャラメル、これは食べ物と言うよりは、彼らにとつての思い出の品だ。たぶん、そうだ。

私はよく農村へ買い出しに出かけていた戦争中のことを思い出していた。いや、それよりは戦後だ。そのころ、アメリカ合州国から誰か知人や二世の親類が来れば、必ず食糧品その他のお土産を山とかがえて来た。彼が近所のスーパーかどこかで買って来たありふれた食糧品だ。それが宝物だった。しかし、わが家には、その宝物を持って来てくれるアメリカ合州国人の知人も親類もいなかった。

私は、娘が訊ねるので、「北朝鮮」の経済の話をした。国家の「マクロ」の大経済の話ではない。

親類の暮らしぶりをかいま見ての「ミクロ」の経済の話だ。七〇年代は上昇、八〇年代にはかなりゆとりが出て来た。九〇年代に入っては少し停滞。ただ私は九〇年代のはじめ元山の彼らの住居を訪れたことを思い出していた。若者たちの平和運動の団体の船で元山に着いたのを幸いに訪れることができたのだが、二人は、食器棚に入ったグラスなどを最近手に入れたものと見せてくれた。しかし、そんなものよりもつとよかつたのは、書棚に本がいつぱいつまっていたことだ。一時、本は取り上げられていたとはあからさまには言わなかつたが推測すればそういうことになる話をしてから、医学専門学校のロシア語の先生、いや、今は「北朝鮮」ではロシア語から英語に外国語教育の基本を切り替えたそうでにわかには英語の教師になった私の姻戚はうれしそうに書棚の本をそろそろ頭髪の薄くなつた頭全体の動きで指してみせた。

その書棚の本の話もふくめて私は娘に姻戚の暮らしぶりから見た「北朝鮮」の経済の話をした。「じゃあ、今は。」

娘が訊ねた。もちろん、娘は、「北朝鮮」の食糧危機、経済困難などの話は知っているのだ。

「もちろん、はるかに落ちているだろう。」

そう私は娘の質問に応じてからつけ加えた。

「しかし、それは、おまえと私の二人がこれから見ることだ。」

北京経由でピョンヤンへ空路行つた。親類からの分を加えての大荷物とともにだ。

ピョンヤンへの便を待つ空港のごった返す待合室のなかには、「祖国訪問」の「在日朝鮮人」たち

の団体の人たちが何人もいた。女性たちはみんなチマ・チョゴリに着替えている。「先生は何んの訪朝の代表団ですか」と声をかけて来た人がいた。さて、何んの代表団か。そうきかれて、私は自分には「北朝鮮」を訪れようとしている気がしていないことにあらためて気がついた。「訪朝」などということは私の心のなかの語彙になかった。親類に会いに行くという気持がそれほどまでに強かったのだろう。彼らの住む朝鮮半島の「北半分」に出かけようとしている気はあっても「訪朝」はなかったのだが、それは、私があるとき「南半分」の私のべつの親類のことを考えていたからだ。「北半分」の親類と電話で「南北対話」をやつてのけた、しかし、そこで両者に共通するアボジの死の話しかなかった「南半分」の親類のことだ。ピオンヤンに「高麗航空」の飛行機が着いたとき、私は娘に言った。「さあ、おまえの親類が住む北半分に来た。南の親類の分まで会うのだぞ。」

娘はうなずいた。彼女はすでに彼女の「南半分」の親類に会っている。済州島でのアボジ、いや、彼女にとつてのハルベの葬儀——「北半分」の親類が誰ひとり来られなかった葬儀のときにだ。

ピオンヤンには六日間いた。

一日目、娘は言った。「思ったよりよかった。」街を車でひとまわりしての感想だ。

三日後、彼女は意見をかえた。外観はみごとな建物もよく見ると、壁が剥げ落ちたままになっている。道路はあちこちで穴が開いたまま放置されている。トロリー・バスや市内電車が停電でとまる。商店は閉まっている。今や職場単位で食糧を確保している。これは私と娘がともに聞いた話だ。外貨を扱う外国人相手の商店にリングがあると聞いて出かけたが、棚はみごとに空っぽ。やっと見つけたトマ

ト一袋を買った。「地震のときみたい。」娘は同情を込めて言った。地震のあと近所のスーパリーの棚がみごとに空っぽになったことを、まだよく彼女は憶えていた。

ピョンヤンでいちばん古いというホテルに泊まった。地方からの「幹部」や「在日」の大学生が来て泊まるというホテルで、外国人はふつう泊まらない。このごろできのホテルは落ちつかなくていいやだ、古いのに泊まりたいという注文をつけたおかげで、私と娘はその昔ソビエトの技術者が建てたという古色蒼然としたホテルの客になった。「二等室」に六日間、十一万円を払って泊まる（「一等室」には、ベッドがひとつしかなかった。「三等室」はひどすぎた）。十一万円は二人の食費込みだが、高いのか安いのか判らない。食事はすべて朝鮮料理。美味、ゴージャスとは言いかねたが、それでも食糧不足の折からとしてはかなり材料を集めていた。ただ、とびきり辛い。娘はろくに食べられない。出発前に近所のスーパリーで買って来たキャラメルをしきりに食べた。それで露命をつないだと言えなくもない。

部屋は次の間つきの立派なものだが、まさに古びている。電話がかからないと思ったら、電話線が切れていた。政治的策略によって切れていたのではない。ただ切れていた。風呂も便所も汚れていて、古い。あちこち毀れてもいる。お湯は朝晩、短かい時間のあいだ出た。

外国人の泊まらないホテルのせいかな、このホテル、電力節約のためだろう、夜おそくになると廊下の電気はすべて消した。廊下は暗黒。どこへも行けない。

早朝、けたたましく外で行進曲が鳴る。「あれは、何。」娘が怯えた顔で言った。行進曲だと判ると、「あれで、みんな、歩いているのね」と同じ表情でつぶけた。昼間、彼女は街のあちこちで彼女と同年輩

の少女少女が列をつくって行進しているのを見ていた。

私たちは自由に街を歩きまわっていたのではなかった。どこへ行くにも、私たちの親類訪問の旅を世話してくれた「組織」からの「指導員」と通訳の二人がついて来た。「北半分」はまだまだ訪問者が自由に動きまわれるところではない。しかし、私は意に介さないことにした。私はべつにこの国の実状を取材しに来たのではない。私はただ娘と親類に会う、娘を親類に会わせるために来たのだ。

二人は親切だった。私たちが親類と会うことに彼らなりに努力してくれたし、親類への大荷物もいやな顔をせずに運んでくれた。親類に会うときには、遠慮して一切顔を見せなかった。そして、二人がいてくれてよかったのは、娘が三日目の夕方になって激しい下痢と高熱とで身動きならない病気になるたからだ。外国人病院へ深夜近く私と娘を運んでくれて強引に話をつけて診察を受けられるようにしてくれたのは「指導員」の男性だったし、通訳の外国語大学で日本語の先生をしているという女性も、同じ年ごろの息子がいるということもあってか、懸命に娘の看病してくれた。

外国人病院の医師も看護婦も有能、親切だった。「すべて朝鮮の薬を使つて治療します。いいですか」と小児科の女性医長は誇りに満ちた口調で言い、私は「お願いします」と答えた。娘は抗生物質をもらい、点滴を受けた。抗生物質を入れたガラス瓶は口のところがゆがんでいたが、点滴の用具は一時代まえるものだったが、そしてまた、便所には紙がなかったが、彼女たちの治療と「朝鮮の薬」はよく効いて、娘は二日後、ようやく少し元気になった。すべては彼女たちの治療と「朝鮮の薬」のおかげで、父親にできたことは夜つびで娘の汚れた下着を洗濯することと、やわらかい紙を探しまわるこ

とだけだ。

少し元気になったところで、「帰りたい」と娘ははじめて言った。それまでこらえていたにちがいない。「病いは気からだ。元気を出せ」と私は言ったが、そんな私の気やすめの激励よりも、ようやくホテルの部屋からかけられるようにしてもらった電話で西宮の「オンマ」と話すことができ、それが彼女の支えとなった。支えは必要だった。日本へ帰るには、また北京へ出て、大まわりして帰るより方法がない。

親類に会いに元山にまで行く必要はなかった。娘の伯母は病気の治療のためにピョンヤンに夫ともに来ていて、医者と結婚してピョンヤン市内に住む娘夫婦のもとに滞在していたし、末の息子の「英才少年」は今は成人して、ピョンヤンの研究所の研究員になっていた。大学受験に失敗して軍隊に入つた長男だけが除隊後元山で仕事を見つけて住んでいる。彼もすでに結婚していて、男の子がひとり。ピョンヤンの娘夫婦にも男の子がひとり。ここで、彼らの両親にとつての孫のことに言及しておきたいのは、日本にいる彼らの姻戚のほうにもすでに孫の世代が男女取り混ぜて何人もいたからだ。死んだアボジ、そして、まだ病院に入りながらもがんばって生きている彼のつれあいの九十歳近い老オモニにとつて、それこそ「東^{トシ}海」をへだてて、日本と朝鮮半島の「北半分」に曾孫たちまでがにぎやかにいることになる。

親類の大半が同じピョンヤンにいることは判つても、彼らがホテルにすぐさまやつて来て一族再会となるようなお国柄には「北半分」はまだなっていない。それでもピョンヤンに着いて一日おい

て、案内役と通訳は娘の伯母と伯父をホテルの私たちの部屋に連れて来てくれて、彼らはすぐ姿を消したが、そのときに娘の下痢と高熱が始まったばかりのときで、これではとうてい会ったとは言えない。娘の病気の回復ぐあいを見はかり、彼らとイトコたちの都合をかねあわせて「正式」に日本、朝鮮「北半分」双方の姻戚一同が会ったのは、ピョンヤンを発つ二日まえのことだ。伯母、伯父、娘夫婦、元山からやって来た長男、娘夫婦の息子の五歳の男の子。かつての「英才少年」の研究所の研究員は来ていなかったが、とにかくこれで私と娘の日本側の二人を入れて総勢八人、姻戚、親類は集まった。案内人と通訳は来ない。気をきかせてくれたにちがいがなかった。

外国人が来たら必らず泊まるという高層ホテルの地下の薄汚い「日本食堂」と称する店で、総勢八人の「姻戚」一同は会食した。私の娘と娘夫婦の五歳の息子はウドン。正確には、それらしきもの。大人一同はスシ定食、トンカツ定食、あるいは、それらしきもの。

伯父はもう昨年、医学専門学校を定年で退職していた。「ほんとは魚釣りしていたらいんです」と言つて笑つたが、それは逆に言うと、そう自分でできなくてあれこれ動いているということだろう。これはどこの国のどの定年退職者にもあることだ。伯母は娘を見ながら、彼女が「帰国」したとき七歳だったという娘の母親が娘にそっくりだとしきりにくり返す。首の手術のあとをフリルのたくさんついたブラウスで隠しているのがかえって痛ましい。彼女は最近手術を受けたのだ。ブラウスは娘の母親がいつか伝手を頼つて送つたものだが、娘が逆に彼女のほうから同じように伝手を頼つて送つて来たピアノ曲のテープの話をした。かつてピアノ教師をしていた彼女にとつてのイトコが自分と同年の中学一年生のときに弾いたショパンのピアノ曲のテープだ。今、私の娘もピアノを習つていて、

同じ曲をときどき弾くので、話が合う。今は、イトコはピアノは弾かない。しかし、近所の主婦のグループでアコーディオンを弾いていると、これは横から彼女の父親の引退教師が口を出した。彼女の夫は外科医。終始黙って微笑しているもの静かな男だ。これもまた娘の母親がいつか誰かに託して送ったカリブ海の絵模様が派手に入ったTシャツを着た彼の五歳の息子ひとりがかはしゃぐ。

話が弾んだというのではなかった。第一、会話はすべて伯母、伯父二人の通訳によつてだ。彼らの娘のもとピアノ教師だけが少し日本語ができる。両親が夫婦ゲンカを日本語でするのを聞いて憶えた。もつともこれはあとで聞いた話だ。

それでも会食の終りごろになると、最初のぎこちなさが消えて、おたがい親しげに話をするまでになった。しかし、もう店も終りの時刻だ。みんなは立ち上つた。それまでたいしてしゃべらなかつた元山から来た、「国際キャンプ場」の管理人をしている長男が娘にむかつて、「今度来たら泊れ」とぶつきらばうに言つた。朝鮮語で言われたので娘が判らず、おどろいた顔を見ると、彼の父親がそうわざとぶつきらばうに乱暴に訳して、そのあとを「このお兄ちゃん、きみにそう言っているのだよ」と今度はやさしい口調にかえてつづけた。「カムサハムニダ」と娘は彼に言つた。長男はうなずき、心底うれしそうな顔をした。

外へ出ると、まっ暗で、人影はなかつた。車に私と娘が乗り込んで動き出したところで、日本語が少しできるもとピアノ教師が彼女にとつてのイトコの私の娘に「また来てね」と日本語で言つた。彼女の両親、私の娘の伯母と伯父はうしろで黙つて手を振つた。

翌々日、私と娘は北京まで帰り着いた。娘はすっかり元氣を取り戻した。北京には食べる物も他の物も山とあった。しかし、娘の関心は他にあつたようだ。ホテルの外の街路を若い男女が抱きあうようにしてふざけあいながら歩いている。黙つて見ていた娘が言った。

「アッパ、ここでは人が笑っている。」

夜、ホテルで、明朝早くの日本への帰国にそなえて、部屋に二つ並んだベッドにそれぞれ早く入つたあと、私は娘に一昨日別れてきたばかりの親類の印象を語つた。親類全体の印象ではない。娘の伯母、伯父について私が長年抱いて来た印象についてだ。

この印象については、私はさつきすでに書いてある。印象は二つあつた。ひとつが、どこの国にもそれぞれに自分の人生を平凡に、しっかりとのかかちづくつて生きている人たちがいて、彼らの人生が、社会であれ国であれ、その根もとをかちづくつて生きている、なら、もうひとつは、どんなとき、ところでも、人はそれぞれに自分の人生を生きている、いや、生きようとしている、それが人間というものだ。――

私は低声でボソボソとしやべつたが、娘が最後まで聞いてくれたかどうかは判らない。はじめのうちにはウン、ウンと私を励ますように声を出してうなずいていた娘がそのうち静かになつたと思つたら、やがて寢息をたて始めた。娘が聞いてくれているかどうかは、どうでもよかつた。私は自分に語つていた。

くたく

人間の死は石膏の塊のようなものだ、私はいつからか考え始めた。動物や他の生きもののことは知らない。人間の死についてはそうだ。そんなふうなものとして、死は人間誰しものまえ、果てにある。若いころから考えて来たことではない。考え出したのは、やはり、年をとり、自分で石膏の塊に近づいて来てからだ。

死のまえに生がある。死が石膏の塊なら、生は水のひろがりだろう。ひろがりの大きさは人間それぞれの寿命によつてちがうが、誰もがそんなに長く生きられるはずもない。たかだか長くて百年だ。ひろがりほたいして広くない。海の茫としたひろがりほそこにはない。もつと狭くこせこせしている。ひろがりの水はたしかに一方に動いて行くのだが、明瞭に流れを形成しているとは見えない。川、まして河ではない。比定するなら湖だが、その神秘の美しさはそこにはない。やはり、ただの水のひろがりだ。そうしておきたい。

動いて行く水の果てに灌があつて、ひろがりほそこでいつかはおしまになる。無数にあるひろがりそれぞれのあいだのちがいは、そのいつか早い遅いかの小さなちがいだ。そのいつかをめがけて、水は動く。動きははじめ動いているのかどうか判らぬぐらい緩慢だ。しかし、そのうちみるみる早くなる。水ははじめ澄んでいるのだが、ひろがりの底に沈んでいたオリが次第に堆積して来て、白

く濁つて来る。おしまいの瀧近くになると、ひろがりは一面の白濁となり、アブクまで噴き出す。そのさまは、水に石膏の粉末を入れて、かきまわしながら量を増やして行くのに似ている。石膏はそのうち固まるが、人間の生も同じように白濁がアブクを噴き出して凝集して行くうちに、突然、固まって白い塊になる。そして、そこは、もう、瀧だ。白い塊はでき上つたとたんに水とともに瀧の下へ落ちる。

そこはサイの河原だ。白い塊がゴロタ石のように一面に散乱している。人間は長くは生きていない。人間ひとりの生がそこに凝集していたところで、塊は、大きくて、まず、大人のコブシ二つ分ぐらいか。赤ん坊で白い塊になつたのなら、それこそ赤ん坊のコブシ大だ。それに、白い塊には、いくらでも欠けたのがある。若くしていくさに駆り出されて死んだのか、それともどこかで住民すべてまとめて殺された口か。大、中、小、半欠けの白いゴロタ石の山が河原のあちこちに堆積している。年月が経つて、ゴロタ石の山は薄汚れている。それでも大方は天寿をまつとうした——いや、そんなものが人間世界にあるはずもない、とにかくタミかベツドの上で死ねた幸運の持ち主のいびつでぶかつこうでも欠けていない白い塊だ。それが一面、一望、まだ白いのも薄汚れたのも限りなく散乱していて、これが、つまり、サイの河原だ。

白い塊は人が建てたがる墓石とちがつて堅固な石、岩ではない。ただの脆い石膏の塊だ。サイの河原は吹きさらしの河原だから、風化は早い。ときどき水もあふれる。白い塊はいくらでも瀧の上からころがり落ちて来るが、やがて、風化、溶解して土に還る、あるいは、水に解けて流される。そんなふうにして白い塊が消えたあと、また新しく白い塊がいくらでも瀧の上から落下して来る。

こうしたことは自然の摂理としてまことにいいことだと思うが、風化、溶解のまえに出かけて行って、父親なり母親なり、夫なり妻なり、息子、娘なり、あるいは、他の誰であれ、白い塊の縁者、そう自分が考える生者が白い塊をくたくすることはできない。これがせめて生者が死者にできる供養ではないかと、年をとり、自分もサイの河原の白い塊に近くなって、私はおそまきながら気がついた。若いときはサイの河原は遠すぎて見えないものだ。見えたつもりでしたり顔に語ったりする若年寄りがいったりするが、たいていはほとんどない方角を見ている。やはり、サイの河原が見えるためには、年をとって、そこに近づくことが必要なようだ。年をとることの功德はまずそれくらいだが、サイの河原が見えて来ると、一面、一望、白いゴロタ石の散乱のなかで、白い塊を拾い上げて、懸命にコブシでくだいている人の姿も見えて来た。懸命の努力が実るかどうか知らないが、死者に敬意を表してのことだろう、ツチなど使わないで自分のコブシでくだいているのはけなげだ。私はそのけなげさに打たれる。死んで白い塊になるのは、人間であるかぎり誰も避けられないことだ。この万古不易、普遍の真理を疑うことはできない。疑うことをできないものを論じることばはない。ことばを超えている。語り得ないことにはゴタクを並べずに黙っている、人間、ことに哲学者はしゃべりすぎるとカッパした、哲学と哲学者が生来嫌いな私が唯一尊重するヴィトゲンシュタイン氏にならって、白い塊そのものについては何もこれ以上何も言わずに黙つていようと思う。ただ、白い塊を自分のコブシでくだけば、いろんなかけらができる。かけらには白い塊の死者のかつての生のかけらもあるれば、その生を生きた時代のかけらもある。血まみれのかけらもあるれば、ナミダが滲むかけらもあるだろう。かけらをどうしようというのではない。かけらを見て考えたところで、それは生者にかかわることであって、死者

に關係のないことだ。死者そのものについて生者にできることは、自分のコブシでくだけてかけらにしたそのかけらに黙って対していることだけだろう。鎮魂というようなおこがましいことばをここで使うつもりはない。ただ、ひよつとすると、それが生者が死者に対してできるただひとつのこととしての供養というものではないかという気はする。

私も父親の白い塊をくづくことにした。父親が死んだのはかれこれ三十年近い昔のことだから、父親の白い塊はサイの河原の吹きさらしと水びたしのなかで風化、溶解が進んで、もうだいぶあちこちが欠けてしまっているが、それでもとにかく父親の白い塊だ。そう信じるのを拾い上げて、くづく。

くづく私はサイの河原のまんなかに立っている。まわりは一面、一望、ゴロタ石の散乱である。そう見てとれる。いや、私の石膏ももう固まり始めていて、私自身が白い塊になりかかっている。それとも、瀧近くのアブクの噴出の白濁のなかに私はまだどつぷりつかって立っている——のか。

父親は明治三十一年、一八九八年の生まれだが、私はそのころこの世にまだいない。生まれたばかりの前世紀人の赤ん坊の父親とこの世にまだいない現世紀人（しかし、もうしばらくで、この現世紀人は前世紀人になる）の私とのあいだには、何んのかかわりあいもない。何んのかかわりあいもないことを考えてみても仕方がない。このあたりのことは、これ以上書くのをやめる。

書くのは、私の父親についての私の記憶が始まったときからだ。そのときから父親は私の世界のなかで存在を始めたのだが、私の父親についての記憶は、実を言うと、私の人生の最初の記憶でもある。

私の生の水のひろがりがあるとき父親の水のひろがりとながったのだが、もうそのときには父親の水のひろがりには白濁して、アブクを激しく噴き出していた。つながったとたんに、白濁はアブクもろとも私の水のひろがりのなかに容赦なく流れ込んだ。

何んという最初の父親の記憶、人生の最初の記憶だったかと、今こう書いていてもあらためて思うのは、その二つ重なり合つての記憶が、父親が長年勤めていた大阪市の市役所を突然クビになった、その知らせを同じようにクビになった同僚が深夜電話で伝えて来た、その直後の記憶であつたからだ。

いや、もうひとつ、記憶は重なり合っている。母親についての私の最初の記憶も、そのときの記憶だ。まだ私が幼稚園にも入らぬ年齢のときだが、夜中、ふと目が覚めると、横の寝床の上に坐つて、母親が泣いていた。派手にすすり泣きをしていたというのではなかつたと思う。しかし、たしかに泣いていた。その記憶はしっかりと私の心のなかにある。

父親はどうしていたか、母親のむこうの寝床の上に母親同様に坐つて、ただ黙り込んでいた。うなだれていたかどうかは知らない。ただ黙り込んでいた。その記憶も私の心の奥底にある。それが私の父親についての最初の記憶だ。

ただならぬけはいがあつた。幼い私にもそのけはいは感じとられた。それも私は憶えている。どうしたの、と私はきかなかつた。私は怯えた。しかし、そのうちまた眠くなつた。眠つた。

これが私の父親についての最初の記憶でもあれば、母親についての最初の記憶でもある。そして、この全体が私の人生の最初の記憶だ。

書いていてあらためて何んという最初の記憶群かと思う。人生、こんなものと割り切り切りたいが、

割り切っても、何かしらサク然とした感が残る。

父親のクビはまったく突然、深夜の電話で知らされたのだから文字通り寝耳に水のクビだ。私とちがつて数学がお得意だった父親はそのころもう中学生になっていた長男——私のいつとう年上の兄の数学の宿題をよくみてやっていたらしいが（私は自分の娘がまだ小学生だったころさえ、算数の宿題をみてやったことがない。三年生か四年生のころに娘がもつて来たのを見渡して、即座に手をあげた）、クビの前日、みてやったのができなかった。父親の同僚に同じように数学のお得意なのがいるので役所に持って行つたが、その人もできなかった。しかし、自宅に帰つて考えてみる、うまくできたら電話すると話は決まつて別れた。このあたりの話はすべてあとで母親が教えてくれたことだが、深夜、電話がかかつて来たとき、父親はその電話であると思つたものらしい。しかし、電話に出てみたら、クビの報知。これで仰天、呆然自失、黙り込まなかつたら、どうかしている。母親が泣いていたとしてもふしぎはない。

今、私が当時の日本の政治のほうが今の日本の政治よりましだったかも知れないと思うのは、この父親の突然のクビのことを考えるからだ。彼はそのころ市役所で課長をしていたのだが、クビは彼の落ち度によるものではなかつた。それどころか、母親のことばなので少し割引きしてもいいかも知れないが、父親は有能な課長として知られた人物だった。それが突然クビになったのは、市長がかわつたからだ。その政権交代によつて、彼のぞくする部署は、局長以下、部長、課長、係長に至るまでの

幹部職員が全員クビになった。

そのころ私たちの一家が住んでいたのは、今のことばで言えば「公務員住宅」、当時の言い方では「官舎」だが、市電が走る、これも当時の言い方で電車道に面して、右から大きな門がまへの局長宅、次にその半分ほどの大きさの部長宅、そのお隣りがさらにその半分ほどの課長宅、つまり、私たち一家の住居、わが家のお隣りが、これは二軒あったが、わが家の半分の大きさの係長宅——というぐあいに役人世界のカナメである階級格差をいささか漫画的に明瞭にした同じ部署の幹部職員たちの「官舎」が並んでいた。この一群の「官舎」の主たちあるしがいつせいにクビになって出て行かなければならなくなったのだから、まとめ上げて言つて、その光景、いっそ壮快である。もちろん、外から見れば、の話だ。

これは今の政治の世界、役人の世界からは考えられもしないことだが、西欧諸国、民主主義の先達を自認する国なら、どこでも長年やつて来ていることだ。ことに激しくやつているのはアメリカ合州国だが、あそこは選挙によつての政権交代こそ政治の要諦、権力は必ずフハイするがこれこそフハイ防止のきめ手——この民主主義政治のイロハにもつとも忠実に、大統領がかわればただちに前大統領が同じ政党の出であろうと役人のえらいのはこそぞつて入れかわる。逆に言えば、入れかわらないような役人はえらい役人ではない。では、新しい大統領が「ホワイト・ハウス」の主あるしになつてクビになつて追い出されたえらいさん方はどうするのか、どうやつてメシを食うのか。たいていが弁護士になるか、回顧録をもものにしてベストセラーを狙う。こうした事態は大統領にかかわつてだけ起こるの

ではない。規模、程度のちがいはあつても、政界、財界、どこでも起こることだ。あるいは、イギリス、フランス、ドイツ、いろんな西欧諸国の民主主義先進国に起こる。

こうした民主主義のイロハの事態がまず起こらないのが、現代、戦後の日本であるにちがいない。大臣がかわろうが知事がかわろうが市長がかわろうが、その下の役人たちはまずかわらない。これは「首長交代」であつても、政権交代ではない。誰が言い出したのか知らないが、私がこの戦後の日本語の「首長交代」の一語ほど民主主義のイロハに反する戦後の日本の政治のさまをよく言いあらわしていることばはないと思うのは、「首」はかわつても下の役人はすべてかわらず、万古不易、役人天国、いや、役人王国の事態が戦後このかたえんえんとつづいて来ているからである。おかげでえらいさん役人はクビにならず、したがって弁護士にもならず、回顧録も書かない。停年まで役所に居つづけて、居つづけたあとも、天下りの機関に天下つて、いや、それを二、三度やつてのけて、退職金を二重、三重に受け取る。

しかし、これは日本が昔からやつて来たことではないかなどと無知なことを言わないでいただきたい。戦前の日本にも政権交代があり、それにとまなうクビもあつた。逆になかつたのは、天下り機関への天下り、退職金の二重、三重取り。いや、もうひとつ言っておきたい。政権交代がただの中間管理職の、それにすぎない課長、係長に至るまでも一挙にクビにするということを、この政権交代大先進国のアメリカ合州国でもやっていないことを戦前日本は壮快にやつてのけた。

本当かね、この私の話。

本当だ、私の父親はただの課長だったが政権交代でクビになり、彼を引きとつてくれる天下り機関

はどこにもなかったのでどこへも行かず、末っ子の私をふくめて妻子五人抱えて、弁護士になった。そこはアメリカ合州国高官に似ている。しかし、たぶん、類似はそこまでだ。

昔は、帝国大学卒業者はよほどえらい存在だったにちがいない。いや、えらい存在にしようとしていたにちがいない。「大正」何年か以前に帝国大学法学部を卒業した人間は、それだけで弁護士になれるという「特権」をもっていた。父親はそうだったので、クビのあと、弁護士になった。大黒柱のクビのあと、私をふくめて私たちの一家がとにかく路頭に迷わずにすんだのは、父親のその「特権」のおかげだ。

しかし、「特権」のおかげで弁護士になれたのと、弁護士でメシを食うようになれるのとはまったくべつなことだ。裁判所の近くに事務所でもかまえばまだしも客は来たかも知れないが、そこにとのような思惑が父親にあったのか、たぶん見ばえのわりに家賃が安かったからだと考えるのが順当な想像だが、裁判所からはるかに遠い、もとの「官舎」の近くの昔の言い方で言うところの「文化住宅」——つまり、外観は洋風だが、中身は「和」の部分がはるかに大きい和洋折衷の住宅の借家にわが一家は移り住んだ。玄関わきの応接間が、わが新米「特権」弁護士の「事務所」だ。

これで客が来たら、ふしぎである。

たちまち、いろんな物が消え始めた。はじめは、かつての「官舎」の応接間の棚に置いてあったトリやら犬やらの置き物、花瓶、東海道五十三次の画帳、ついで、「洋行」した知人に安く買ってもらった、そして、自慢げに私たち子供に見せながら、まるで宝物のように扱って子供には絶対触らせ

ようとしなかったライカ。いや、そのうち、ある日、幼稚園から私が帰つて来ると、もと応接間の父親の「事務所」につづくもうひとつの洋間がやけにひろびろとして見えた。ソファやら何やらの家具がみごとに姿を消していた。どうしたの、と私はきかなかつた。ただならぬけはいが、最初の記憶群のときと同じようにそのときも、そこにたち込めているような気がしたからだ。

どれほどの期間、客が来なかつたか。私はまだまだ幼かつたのでよく判らない。憶えているのは、玄関わきのもと応接間の新米「特権」弁護士の「事務所」で、彼がしょげいなげに煙草をふかして坐っていたのをときどき見かけたことと、もうひとつ、それだけではどこかの古家具屋の店に消えてしまわなかつた大きな事務机にドイツ語や英語の本を積み上げて語学の勉強をしていたことだ。そのころ彼はもう四十歳前後の年になっていたから、中年男の懸命の語学の勉強をけなげなものとして賞揚したい気持ちするが、同時に、よほど彼はウツ屈していたにちがいないとも思う。とにかく前途有望の人生を突然自分に責任のないことでヘシ折られたのだ。その上、やつと新規まきなおして始めた仕事に客が来ないとあつては、気がどんづまりに来ていてふしぎはないだろう。こういうどんづまりのときは、語学の勉強ほど気をまぎらわせてくれるものはない。彼は毎日一度は何時間か、ドイツ語と英語にむかいあつていた。日課にしているのかも知れなかつた。

ドイツ語は、かつて父親が（旧制）高校で学んでいたものだ。彼の学力の程度がどれくらいだったか今となつては知る由もないが、彼のドイツ語への打ち込みぶりは、ことばそのものより、どうやら高校時代という彼にとつてまたとない青春の時代に結びついてのものであつたようだ。ドイツ語にむきあつているあいだ、彼はそこに立ち還ることができたにちがいない。昔の高校出身者には、いまだ

に寮歌祭というようなものを開いて、彼らの好みのヘイ衣破帽姿で自分の出身高校の寮歌なるものをおらび上げる老人たちがいるものだが、私の父親もドイツ語にむきあっているあいだ、あれはひとりで寮歌祭をやっていたのだろう。彼もときどき風呂のなかで低い声で自分の出た高校の寮歌を遠慮がちに歌うと言うよりはうなづいていたが（風呂は、「和」のほうがはるかに優勢な和洋折衷の「文化住宅」らしく古風なゴエモン風呂だった。私たちの隣人は同じ「文化住宅」に住むイギリス人の中学教師だったが、彼も鉄釜の風呂に入っていたにちがいない。もつともイギリス人が鉄釜の風呂に入っていたのはそれから短かい期間のことだ、やがていくさの影が急速に色濃くなつて、この「敵性外人」は姿を消した）、鉄釜のなかの寮歌祭よりも客の来ない「事務所」での寮歌祭のほうが、同じ自分ひとりの寮歌祭としても父親の性に合っていたように思う。

つづきは製品版でお読みください。